

『新国王』に現れた韓国観

『アルト・ハイデルベルク』との比較において

李 応 寿

1、はじめに

1910年10月5日の大阪毎日新聞には、次のような記事が載っています。

北濱帝國座は、脚本「朝鮮王」でごたつて擦た揉んだの末、ちよせん（ママ）物にはなるまいとの事であつたが、とうとう「新國王」と外題をすゑて、1日から開場した。

この記事で注目にあたいるのは、二つの事実だと思います。まず、『新国王』という戯曲があつて、その元々の題目は『朝鮮王』であつたこと、それから、この戯曲を上演するにあたって、政府当局と何らかの形でもめていたことです。

では、どうしてこのような問題が起こつたのでしょうか。戯曲『新国王』は、はたしてどんな内容であつたのでしょうか。今日の私の発表では、『新国王』の原典になったドイツの戯曲『アルト・ハイデルベルク』との比較を通して、それを明らかにしてみたいと思います。

2、『アルト・ハイデルベルク』を翻案した人

帝國座は、伊藤博文（1841～1909）、金子堅太郎（1853～1942）などの提案を受けて、実業家の岩下清周（1857～1928）が大阪の北浜に建てた劇場で、1910年3月に開場して以来、川上音二郎（1864～1911）が一切の経営を担当し

ていました。この帝国座で、『新国王』は上演されました。では、『新国王』はどんな内容であったのか。まず、その概略を見てみましょう。

資料①は、早稲田大学演劇博物館に保管されている手書きの筋書きをもとに、私がまとめた大筋です。それをさらに要約しますと、新国の王子竜坤は、個人教授の井殿博士の提唱により、いわゆる「新しい空気」に接するため日本の京都に留学するが、宿泊先の青柳亭の下女お花と恋に陥ってしまう。しかし、王子は新国の後を継ぐべき人で、この恋は成就されず、「人間の春の短かさ」を惜しみつつ別れる、という筋です。

それでは、『新国王』の内容の検討に入る前に、まず作者のことを特定しておくことにしましょう。なぜなら、文学作品の持つ内容というのは、それを書いた作者の思想をそのまま反映していると思われるからであります。

資料②の<中略>以後の部分を見て下さい。「日韓併合の動きを見て、『朝鮮王』と題して川上が台本を書いたところ」云々と、『新国王』を川上音二郎自らが書いたことになっています。しかし、川上はあくまでも興行師であり、文筆家ではありませんでしたし、当時彼は、後の死因にもなった腹膜炎にかかっていたため、体調がすぐれませんでした。したがって、資料②の前半に出ている座付作者たち、すなわち佐藤紅緑（1874～1949）や柳川春葉（1877～1918）が『新国王』を書いていたのではないかと、まず推測されましょう。

しかし面白いことに、川上研究家の白川宣力は、「明治期西洋種戯曲上演年表（二）完」（『演劇研究』18号、1995年3月）のなかで、『新国王』は巖谷小波（1870～1933）の翻案によるものであると言っています。ドイツの作家マイアー・フェルスター（Wilhelm Meyer Förster 1862～1934）の書いた戯曲『アルト・ハイデルベルク（Alt Heidelberg）』が、この作品の原典にあたるといことです。

こうなると、作者の特定がややこしくなってきますが、資料③に見られるように、巖谷小波のおとぎ芝居を川上音二郎が帝国座で上演したこともあり、また、当時の演劇界では座付作者の役割がそれほど大きくはなかったという現実

もあるので、ここでは、取りあえず巖谷小波について検証してみることにしたいと思います。

巖谷小波は、児童文学家でもあり、ドイツ文学家でもあった人で、1900年9月、ベルリン大学付属東洋語学校の講師としてドイツに招かれました。1902年11月に帰朝するまで2年余のドイツ生活をまとめた『小波洋行土産』（博文館、1903）の上巻には、「川上一座の興行」という題で、川上一座が3回目の海外公演の一環としてドイツに立ち寄った時の感想を書いた文章が載っています。

そして資料④に、「振付は、川上一座の藤澤淺二郎氏に、下座は中村仲吉嬢、さて外題は『音曲聲』、一名『音楽の力』と云ふので、作者は東洋學校（ママ）講師、……實はかく云ふ小波なのである」と書いてあるとおり、巖谷小波は川上音二郎および貞奴の上演を鑑賞したにとどまらず、自分の書いた作品を、川上の協力を得て上演までしています。1901年12月のことですから、巖谷小波と川上音二郎は、帝国座で『新国王』を上演する10年前から、一緒に演劇活動をしていたことがうかがえます。

では、巖谷小波が『新国王』を翻案した可能性は、どうでしょうか。

『アルト・ハイデルベルク』が戯曲として正式に日本に紹介されたのは、松居松葉（1870～1933）によってのことで、松居松葉は、1913年2月、坪内逍遙の率いる文芸協会の第5回公演として、『アルト・ハイデルベルク』を『思ひ出』という名前に意訳し、有楽座で上演しています。

しかし、「僕は、先年歸朝の後間もなく、京都の日出新聞紙上に、これを翻案した時には、『ある（ママ）京都』とやつてのけた」（『思ひ出』の思ひ出『演芸倶楽部』1914年1月）というふうに巖谷小波自身が言っているように、巖谷小波は、松居松葉よりも早い時期の1903年の時点で、すでにこの作品を翻案していたことが認められます。実際、この作品は、1903年3月27日から6月10日まで、75回にかけて、「あゝ京都」という題の連載小説として京都日出新聞に発表されました。ドイツから帰って来て、4ヶ月しか経っていない早い時期のことです。

とはいえ、原作とはジャンルが違うだけに、翻案とは言いにくく、いわゆる脚色物になっています。資料⑤で指摘されているような『アルト・ハイデルベルク』の価値は、……明るくして哀愁にとめる青春時代の思出を一般観衆の心に再現せしむる點に存在する」といった、いわゆる恋物語としてのテーマそのものはたしかに保っているものの、原作から省略された部分が多いのはもちろん、筋の概略だけを取り、その他の背景なども完全に日本化してしまっています。原作の面影が残っているとすれば、資料⑥で明らかのように、主人公の「Karl Heinrich」王子を春海家の当主「香留夫」に、その個人教授の「phil. Jüttner」博士を教育係りの「湯戸」文学士に、属官の「Lutz」を家従「古津」にしたことぐらいであります。

3、『新国王』におけるテーマの変遷

では、戯曲『新国王』の場合はどうでしょうか。

『新国王』の場合、外形的な構成の変換、すなわち原作のカルスブルク宮殿が朝鮮の昌寿殿に、ハイデルベルク大学が京都大学に変わっているのは、翻案であるから、当たり前のことであると言えます。

しかし、内容を見ていきますと、たとえば先ほどの小説版「あゝ京都」の中では、王子の留学の目的が、原作と同じくほとんど重視されていなかったのに対して、戯曲仕立ての『新国王』では、王子竜坤の留学目的がことさら強調されているのが、まず目につきます。その一部を、見てみましょう。() のなかは、検閲で消された所です。

博士：殿下、今の甲（宋）氏の意見なるものをお聞きになりましたか。彼の方は、こ（朝鮮）の城において、殿下を旧慣の犠牲として置こうとするのみならず、日本の京都においても、道德の擒にして置こうとするのです。自由の思想、新空氣の漲っている日本の古都、京都の天地に、黴臭いこの国（朝鮮）の空氣を輸入するのは、私の任ではございません。

私は、今度のお供は真っ平でございます。

王（子）：博士、そんなにやかましく云うには当たらないじゃないか。博士も、だいふ年を取ったねー。

博士：殿下、仰せの通り、私も初めてこちら（朝鮮）に参った時には、まだうございました。私はこの国（朝鮮）に、東西の思潮を融合したる新文化の理想国を打ち立てようと思ったのです。殿下を教養し奉って、殿下をして世界の新文芸、新美術の大保存者たり、大宣伝者たらしめたと思ったのです。この国（朝鮮）は、政治上から弱者の位置に立ったかもしれないが、思想の上では、東西両洋の思潮を一団として、新しい光輝ある文明の根源たることができるようにしようと思ったのです。しかし、私は一年にして、自分の理想が空想であったことを知りました。殿下のまわりの空気は、そのような文明を醗酵するには、あまりに力がなさ過ぎました。あまり旧習慣になずみ過ぎておりました。で、私は自分の足の底の塵を払って、この国を去ろうかと思いました……。

王（子）：（かなしげに）博士……博士……。

この場面は、王子の個人教授井殿博士が王子竜坤に留学の目的を述べる場面ですが、同じ場面の資料⑦の番匠谷英一の直訳はもちろん、松居松葉の意訳に比べても、原作の『アルト・ハイデルベルク』とは留学の目的がだいぶ違っていることが分かります。

要するに、原作では、「近來諸侯の公子達は、一年間大學の課程を修められる習慣になつて居る」のが留学の理由で、それに伴う「三鞭酒（シャンペン）、バーデン葡萄酒（ワイン）、マイ葡萄酒、若い娘っ子、朗かな大学生」との出会いを楽しみにしているのに対して、『新国王』では、「個人教授の井殿博士の提唱により」留学が実現されたのはもちろん、「私はこの国（朝鮮）に、東西の思潮を融合したる新文化の理想国を打ち立てようと思ったのです。殿下を教養し奉って、殿下をして世界の新文芸、新美術の大保存者たり、大宣伝者たら

しめたいと考えたのです」云々と出ているように、教育的な意図の下で、留学が行われました。そしてそれは、当時の日韓両国の政治情勢を、そのまま反映するものでもありました。

4、新しいテーマの背景にあるもの

では、当時の両国の情勢はどうだったのでしょうか。『新国王』は、それどのように反映し、どうして政府当局ともめざるを得なかったのでしょうか。

ご承知のとおり、韓国が日本に併合されたのは、『新国王』が上演される1ヶ月余前の1910年8月29日のことであります。しかし、それは表に現れた結果であって、日韓併合の運命は、かなり以前からの政治情勢の積み重ねによっていたものと認識しなければなりません。なぜなら、西洋に対する開国が日本より遅れていたことに加えて、1904年の第1次日韓協約、1905年の第2次日韓協約、1907年の第3次日韓協約などにより、韓国の政治および外交、軍事権は、日韓併合以前から、すでに日本に左右されていたからであります。

このような一連の政治情勢の中で、初代韓国統監であった伊藤博文は、1907年8月、韓国の皇太子である英親王^{イウン}李垠（1897～1970）の日本留学を提案します。10月には日本の皇太子、後の大正天皇が韓国を儀礼訪問し、その答礼の形を取って行われた英親王の日本留学は、韓国としては未曾有の出来事であっただけに、資料⑧のように大々的な行事として執り行われました。これを見ますと、英親王の個人教授である太子大師には伊藤博文が、侍従武官長には^{チョドンユン}趙東潤がそれぞれ任命されていたことが分かります。とりわけ趙東潤の名字は、政府当局の検閲により「祥別堂」として書き換えさせられる前までは、戯曲『新国王』の中でも本名のままで出ていました。

それでは、英親王の留学の実際の目的は、どこにあったのでしょうか。それは非常に微妙な問題で、歴史の研究家でない私が結論を急ぐのは危険なことかもしれません。しかし、少なくとも日本側においては、次のような二つの相反する側面があったように思われます。

まず、1908年8月20日付けの大阪朝日新聞は「天声人語」で、伊藤博文が英親王に「大和魂の本義を論ず」る場面を紹介した上で、記者の見解として、「我が國に永年の教育を受けたまふ間に、朝鮮魂は亡くなつて日本魂になりたまふことぢやらう」などと述べています。

それに比べ、英親王が研修旅行のため東北地方を訪れた時、水戸で開かれた歓迎会で伊藤博文本人が行った演説（春畝公追頌会『伊藤博文伝』下巻、統正社、1940、p.853）には、「今晚人力車より當地の官民有志諸君と多數の小學生徒が提灯を列ねて行くを見たが、誠に友邦の情誼を重んじ、殊に日韓兩國の關係は殆ど兄弟もただならざるものがある」というふうに出ています。

片方は、「朝鮮魂は亡くなつて日本魂になりたまふ」との指摘であり、片方は、「誠に友邦の情誼を重んじ」との指摘であるので、両者明らかに矛盾しているのですが、これは恐らく、日本でよく言われる「本音」と「建前」の使い分けであろうと理解して差し支えないかと思います。

とすれば、戯曲『新国王』の検閲騒動は、この「建前」に引っかかったことになるでしょう。それを確かめるために、ここで、検閲の経緯を詳しくたどってみますと、まず当時は、1900年11月15日に改正された「演劇取締規制」がそのまま適用されていた時代で、その第2章「興行の部」の第23条を見ると、「勸善懲惡……」などに並んで、上演を禁ずる対象として「政談ニ紛ハシキモノ」というくだりがあります。

これを根拠に、『新国王』の検閲も行われたものと推定できます。実際、大阪毎日新聞1910年9月23日の「演芸世界」欄には、「帝國座の如きは當地の模範とする劇場」であるから、「是れまでの脚本なども、當署限りにて認可を與へて來たが、今度のは藝題が朝鮮王とあるので、脚本を本部へ廻したところ、協議の結果、不認可となつた」というふうに出ています。要するに、検閲の担当者である警察から見て、まず戯曲の題目から問題になったわけであります。

この不認可を受けて、川上音二郎は、直ちに直訴します。同じ新聞の翌日の記事によりますと、川上は高崎知事の官舎を訪ね、再び認可を請求します。し

かし結果は、天野保安課長に呼ばれ、「政事と藝術を混同せず、昔の川音でなく、今日の川上となつて實行を期しては如何」と注意される運びとなりました。

それで、冒頭でもご紹介したとおり、『新国王』と急遽外題を変え、10月1日からやっと上演にこぎ着けたわけではありますが、ここで注目したいのは、「昔の川音でなく、今日の川上」というくだりです。ご承知のとおり、川上は、1894年の一連の日清戦争劇により演劇界の全面に躍り出るまでは、自由民権運動の熱烈な支持者で、「oppakepe節」に代表される激しい政治宣伝のあまり、投獄されたことも数多くありました。したがって「川音」というのは、まるで川の音のようにうるさく音を立て、世間を騒がせた張本人であった川上の過去のあだ名（福田秀一のご指摘）であり、それを保安課長がひねくって言った言い方であったのかもしれない。

5、川上の『新国王』上演の意図

では、当時すでに演劇界のリーダーの一人であった川上音二郎は、なぜ、このような注意を受けながらも『新国王』の上演に固執したのでしょうか。財政上の事情など、いろいろ理由があっただろうと思われますが、私は、次のような理由も大きかったのではないかと、推測します。

それは、前年の1909年10月26日、ハルビンで安重根^{アンジュンクン}（1879～1910）の銃に撃たれ、不帰の客となった伊藤博文に対する鎮魂の意味を持たせていた上演ではなかったか、という点です。実のところ、伊藤博文は貞奴・音二郎夫妻をなにくれとなく支援してくれた人でした。資料⑨で明らかなおとおり、伊藤博文は、貞奴が音二郎と結婚する前の霞町の名妓であった時からの知り合いで、貞奴を水揚げしたのはもちろん、結婚した後も、川上音二郎が日清戦争の取材のために韓半島に渡る時には、蔭でビザの問題を解決してやったという噂が立つほど、川上夫妻を支援していました。そして、現に『新国王』の上演場所である帝国座も、冒頭で紹介したとおり、伊藤博文の提案によって建てられた劇場であります。

では、このような因縁があったにせよ、川上音二郎は、なぜ、ほかでもない『アルト・ハイデルベルク』の翻案物である『朝鮮王』、すなわち『新国王』を以て伊藤博文の霊を慰めようとしたのか。それには、もう一つの秘密が隠されていたのではないかと考えられます。

それは、一言で言いますと、ドイツでの因縁です。前にも触れましたとおり、巖谷小波がドイツのベルリンに滞在したのは、1900年9月から約2年間のことであります。そしてその間、川上一座はヨーロッパの巡回公演の一環としてベルリンにやってきました。1901年11月18日からは『武士と芸妓』などを上演していましたし、12月には、巖谷小波作『音曲舞』のスタッフもしていました。

そこへ、実は、伊藤博文も合流していたのです。資料⑨の後半がそれで、「年末（1901年の暮れ）に伊藤博文がやってきた。……伊藤は旧知の川上夫妻を呼んで、三味線をひかせながら『出雲節』を歌った」と出ているとおり、伊藤博文は川上夫妻とベルリンで逢っています。巖谷小波も『小波洋行土産』のなかで「伊藤侯爵歓迎会」と題した文章を残しているのを考え合わせると、伊藤博文との交流があったことが推測されます。

さて、『アルト・ハイデルベルク』となりますと、この作品が初めて舞台にあがったのは、1901年11月22日、「ベルリン座」においてであります。松居松葉によりますと（『思ひ出』明文館、1913、p.1）、この作品は、一夜にして作家のマイアー・フェルスターを有名人にした作品でありますから、当時ベルリンに滞在していた伊藤博文、川上夫妻、巖谷小波の4人が、揃って現地でこの作品を観ていたことは十分考えられます。そしてそれは、資料①の『新国王』の大筋の第2場（青柳亭の場）が、「伊藤の洋行に随行した香山の経営する料理屋（青柳亭）」として設定されていることから、うかがい知ることができます。

6、おわりに

以上の検証で、川上音二郎が検閲を受けながらも『新国王』の上演に拘って

いた理由が、浮き彫りにされたと思います。それは、言うまでもなく、日頃の支援者伊藤博文に対する鎮魂であります。そして、もしその意味が多く働いたとするならば、ドイツで一緒に観ていた『アルト・ハイデルベルク』こそ鎮魂のための最適の作品であっただろうし、加えて、『新国王』の書き手が巖谷小波であったことも、十分納得されます。なお、このような仮説は、川上音二郎自らが『新国王』の中のいわゆる伊藤博文の役割、すなわち王子の個人教授の文学博士井殿弘役を演じていた（大阪毎日新聞、1910年10月1日の番付記事）ことから傍証できます。

しかしながら、『新国王』の舞台そのものは、英親王の留学目的を、原作のカール・ハインリヒ王子の留学目的とは違った形に書き改めたことによって、かえって劇としてのバランスを欠いた様子を呈しています。言い換えると、井殿博士（伊藤博文）の役割を無理に拡大し、しかも井殿博士をして当時の日本の「本音」を発言させることによって、伊藤博文に対する鎮魂の意味を必要以上に強調し過ぎたがために、資料⑩の「此の劇が全体に灰色である如く、井殿博士も灰色」という指摘にもあるとおり、劇的にはバランスを欠いてしまった。そしてその「本音」は、「建前」とは相反する韓国観を表出しているだけに、検閲の対象となったということが指摘できるだろうと思います。

資料①

〈第1場 昌寿殿の場〉 新国の王子竜坤は、個人教師である井殿博士の提唱により、京都大学文学部に留学することになった。博士は進歩的な教師で、朝廷には彼の教育方針に反対する人物も多い。甲伯爵もその中の一人である。伯爵は、王子の尊厳さに差し障りがあってはいけなないと、日本での特別扱いを主張するが、博士は、「新しい空気」に接することの大事さを強調し、甲論乙駁が続く。あげくの果て、博士は日本へ行くのを辞めたいとまで言い出す。そこで、王子が自分は平民扱いを希望すると申し出る。やっと騒ぎは収まり、王子は祥別堂、孫侍従、そして井殿博士と共に日本へ向かう。

〈第2場 青柳亭の場〉 鴨川沿いにある青柳亭は、伊藤の洋行に随行した香山の経営する料理屋で、ドイツからの輸入ビールを出すなど、ハイカラな所である。王子の宿所でもあるこの店で、井殿博士の友人の桜山男爵、大沢京都大学助教授らが歓迎式を準備する。祥別堂は、オンドルもないし、女性たちの言葉使いが荒いと宿泊に反対するが、折しも歓迎式が始まってしまう。歓迎の辞は青柳亭のお花が英語で述べるようになっていた。女中の身分であるお花は、発音を覚えるのが精一杯であったが、式の後、王子は彼女に心が惹かれる。しかし、お花には許嫁がいた。

〈第3場 青柳亭の王子部屋の場〉 王子は夜遊びに耽っている。祥別堂が待っている中、今日も朝6時になって門を叩く。門を開けたお花が真っ黒な王子の手に驚き、訳を聞くと、比叡山からの帰りに芋狩りをして焼いて食べたからだと言う。日本の生活に適應できずリューマチにかかっていた別堂は、この話で虚しさを感じる。王子は、すでに平民生活に馴れていたのである。その日、王子は東京見物にお花を誘う。お花が着替えに行っている間、朝廷から電報が届く。「急遽帰国せよ」との知らせであった。仕方なく王子は帰朝の途に着くが、戻って来る口実を作るため、井殿博士は残して行く。

〈第4場 王宮の王子の居間の場〉 王子が帰朝してから1年が経った秋。2週間後には、王子の結婚式が予定されている。しかし、王子自身は笑うこともなく、憂鬱な毎日を送り続ける。甲伯爵をはじめ大臣が心配しているところへ、京都から山崎がやってくる。山崎は、王子が京都にいた時、後で部下にしてやると約束した人物である。約束を忘れずに訪ねてきた山崎に、王子は色々と京都のことを聞く。お花のことも聞く。なぜか許嫁との結婚もせず、笑みをなくした日々を送っているという答えに、王子の心は乱れる。そのせいか、祥別堂を呼んで京都への旅支度を命令する。

〈第5場 青柳亭の場〉 日本入国の際身分がばれてしまった王子は、仕方なく京都府庁の手配したホテルに泊まっている。今日は朝早くから井殿博士のお墓参りをし、青柳亭に向かう。王子来訪の知らせに接した香山夫婦は、至急

お花探しに人を行かせる一方、歓迎の準備を急ぐ。王子が青柳亭に着く。しかし、息をつく暇もなく、府庁からの使いが電報を持って現れる。王子は、今日の夜行で帰国しなければならなくなった。そこへ、お花が買い物から戻る。涙の再会の後、二人の顔には久しぶりに微笑みが浮かんだが、それもつかの間、「人間、春ってものは、随分短かいものね」というお花の嘆きを後に、王子は出て行く。

資料②

川上最後の業績は、北浜銀行などの後援によって、大阪・北浜に建築した三階建ての純洋風劇場帝国座だが（明治四十三年三月）、帝国劇場にさがけて椅子席を採用した川上念願の新劇場で、佐藤紅緑・柳川春葉などを座付作者に数回の興行を持った＜中略＞『新国王』は、日韓併合の動きを見て、『朝鮮王』と題して川上が台本を書いたところ上演不許可になった。

（大笹吉雄『日本現代演劇史』白水社、1985、p.60）

資料③

五月には帝国座へ帰り、＜中略＞八日を手初めに日曜日ごとの昼間、おとぎ芝居の無料公演をはじめた。演目は、『楠公袂別』と『龍宮のお使』（巖谷小波作）である。（倉田喜弘『近代劇のあけぼの』毎日選書、1981、p.251）

資料④

時は明治三十四年十二月十八日。所は去年と同じクレブス、ホテル。役者は岩井根津之助事、本名ツール、ネッデン。中村物太郎事、本名ブットマン。市川國三郎事、本名クノブラフの三氏で、此等は皆東洋語学校の卒業生、若くは上級生。＜中略＞また振付は、川上一座の藤澤浅二郎氏に、下座は中村仲吉嬢、さて外題は『音曲簞』、一名『音楽の力』と云ふので、作者は東洋学校（ママ）講師、……実はかく云ふ小波なのである。

(巖谷小波「独逸人の日本語劇」『小波洋行土産』上巻、博文館、1903、p.266)

資料⑤

『アルト・ハイデルベルク』の価値は、ネカー河に臨める風光明媚の大學都市ハイデルベルクを背景として、若くして楽しき學生生活の歎びと、甘美にして清純なる戀愛を描き、しかもその青春の日の過ぎ去ることいかに早きかを素僕と感傷に於てに（ママ）表現し、明るくして哀愁にとめる青春時代の思出を一般觀衆の心に再現せしむる點に存在する。

(『アルト・ハイデルベルク』番匠谷英一訳、岩波文庫、1935、p.151)

資料⑥

拙者は某州の國守、侯爵春海家の家従、古津正直と申す者で御座るが、此度御當主香留夫様が、京都大學の聽講生に成つて、向ふ三年間、此の京都に御滞在の事と相成つた。＜中略＞殊に又御側には、御幼少の頃からの御教育係り、文學士湯戸直也殿、及びかく云ふ古津めも、常時御附き申す次第である。

(「あゝ京都」 京都日出新聞 1903年3月28日)

資料⑦

國務卿：ところで顧問官、貴方は今後一年間極めて重要なる任務を負はれねばならぬ。御承知のごとく、近來諸侯の公子達は一年間大學の課程を修められる習慣になつて居るやうだが、—これは「不幸にも」と申上ぐべきかどうか私にも分らない。が、とにかく大公殿下に於かれてもこの習慣に従はれ、公子殿下をハイデルベルクへお遣はし遊ばされることに御決心遊ばされた(p.19) <中略>

博士（低く）：ところで、ハイデルベルクと來たら。貴方は御存知ない。だからハイデルベルクといふ言葉が何を意味するか、ちつともお分りにならん。いはば三鞭酒（シャンペン）の味です—いや、三鞭酒（シャンペン）どころ

ぢやない。バーデン葡萄酒（ワイン）とマイ葡萄酒（ワイン）＋（プラス）若い娘つ子＋（プラス）朗かな大學生ですぞ。私はそこで三年暮しました。カル・ハインツ。しかし私はもう行きませんぞ。

カル・ハインリヒ：行つたつていゝぢやないか。

博士：一人でいらつしやい。顧問官なんぞお連れなさるな。

（『アルト・ハイデルベルク』番匠谷英一訳、岩波文庫、1935、p.25）

資料⑧

明治四十年（一九〇七）十二月五日、英親王は伊藤公に伴われて日本留学の途にのぼった。午前九時出発、敦化門前から南大門停留場まで、日韓両国警官が警戒に当たった。太子大師伊藤公は、馬車にて先導、統監府官吏、宮内府大臣李允用、農商工部大臣宋秉峻、東宮大夫高義敬らがこれに従った。

英親王は、武官の服装というから陸軍参尉の服装を召されたのであろう。玉車にご乗車になり、侍従武官長趙東潤（明治四年生）が陪乗した。日本騎兵二個小隊が前後を警衛し、各学校生徒、各界紳士、一般民衆が沿道の左右に林立して万歳を連呼した。（岡崎清編『英親王李垠伝』共栄書房、1978、pp.71～72）

資料⑨

明治二十年（一八八七）、貞奴は、伊藤博文によってみずあげされ、一人前の芸者になった。小奴の小を取り、ただの奴になった。奴というのは葭町の名妓だけに与えられる名である。（pp.35～36）〈中略〉

パリ公演の約束を果たすと、一座はドイツに移った。ベルリンに行った。ベルリンには約百人の会員で組織された日本人会があった。またベルリン大学の付属の東洋語学校には巖谷小波がいた。（p.147）〈中略〉

加えて、年末に伊藤博文がやってきた。伊藤はアメリカからロシアへ向かう途中だった。ベルリンに着くと、伊藤は旧知の川上夫妻を呼んで、三味線をひかせながら『出雲節』を歌った。

資料⑩

川上は「新國王」の井殿博士を勤めて居る、例の如く熱心だが此の劇が全体に灰色である如く井殿博士も灰色である、含蓄はあるがモツサリして居る、京都へ歸つて来てからの博士は或處に一點の花やかな個所がありたい、此人を其まゝで直ぐに墓場へやり度くはない (大阪毎日新聞 1910年10月4日)

* 討議要旨

呉鉉烈氏は、日韓併合直前に朝鮮の王宮において能楽が演じられている、また国風社という政治団体がこれに関わっているが、このことについてどう考えるか、と質問し、発表者は、その事実を知らないで現時点では判断できない、と答えた。中島国彦氏(座長)は、この時期の日韓をめぐる事柄はまだまだ知られていない点が多く、情報交換を進める必要がある、と補足した。

武井協三氏は、鎮魂というのは日本の演劇の本質であると言われているが、そういう意味で伊藤博文の鎮魂を捉えてよいのか、と質問し、発表者は、それほど深い意味ではない、「記念」くらいに言ってもいいかもしれない、また、王子と下女との恋愛、など他のテーマも含まれている、と答えた。

福田秀氏は、番匠谷英一の翻訳は、我々世代の者にはバイブルのようなものであったことを紹介し、作中の詩を暗誦してみせた上で、小波の翻案小説は原作の戯曲ではなく小説を参考にした可能性はないか、と質問し、発表者はその可能性もあるが、圧倒的に流行したのは戯曲化されて以後であるから、少なくとも翻案のきっかけは戯曲であろう、と答えた。